

授業科目	基礎看護学統合演習	学年	3学年
		単位	1
時期	前期	時間	30
科目設定理由	<p>本科目では、1・2年次に学んだ生活援助技術・診療に伴う技術・臨地実習等の学習を統合し、健康が障害された対象の個別的な状態に応じた身体・生活の観察及びアセスメントと、これにもとづく対象の生活援助技術・診療に伴う技術の適切な選択・実施・評価が実践できる能力の獲得を目指す。シミュレーション学習を通し、対象の状態や状況、対象の個性に合わせた看護介入を実践しながら研究的に検討を重ね、よりよい援助の実践に繋げる。また、自らの看護実践を客観的に振り返り、引き続き開講される各専門領域の学習や実習前の自己課題の明確化を行う。</p>		
目的	健康が障害された対象の個別に応じた生活援助技術・診療に伴う技術の適切な選択・実施・評価ができる能力を育む。		
目標	<p>1.健康が障害された対象の個別的な状態に応じた身体・生活の観察及びアセスメントができる。 2.アセスメントにもとづく対象の生活援助技術・診療に伴う技術の適切な選択、実施、評価が実践できる 3.実践において、対象者及び看護職者に対し、状況に応じたコミュニケーションや報告・連絡・相談ができる 4.各専門領域の実習前の自己の課題を明確にできる</p>		
評価方法	パフォーマンス評価		
使用テキスト	<p><系統看護学講座> 専門分野・基礎看護学2・基礎看護技術Ⅰ：医学書院 <系統看護学講座> 専門分野・基礎看護学3・基礎看護技術Ⅱ：医学書院 看護がみえるVol3 フィジカルアセスメント</p>		
参考図書	根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術：医学書院		
科目担当	専任教員	看護師として附属病院で13年間の実務経験者	

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
1	科目の目的と学習方法	学習課題を理解する。	オリエンテーション 状況設定シナリオと課題提示 事前学習課題の提示	講義	
2	対象理解および基礎知識の共有	対象の状況を理解し、援助計画を立案する。	対象理解 基礎知識の共有 アセスメントの基づく援助計画の立案	演習	
3	アセスメントに基づく対象への援助（生活編）①	個性性をふまえた援助を考えることができる。	援助方法の検討とプレゼンテーション	演習	<生活編の事例に取り入れる内容>
4	アセスメントに基づく対象への援助（生活編）②	状況に応じた個性のある援助を実践を通して学ぶ。	対象への看護実践のシミュレーション 対象への援助を実践しながらよりよい介入を検討する 自己の看護実践を振り返る	演習	①点滴をしている対象の寝衣交換、オムツ交換
5	アセスメントに基づく対象への援助（生活編）③	状況に応じた個性のある援助を実践を通して学ぶ。	対象への看護実践のシミュレーション 対象への援助を実践しながらよりよい介入を検討する 自己の看護実践を振り返る	演習	②臥床状態にある対象の部分浴
6	アセスメントに基づく対象への援助（生活編）④	状況に応じた個性のある援助を実践を通して学ぶ。	対象への看護実践の発表	演習	
7	自己課題の明確化とまとめ	学びを意味づけし、自己の課題を明確にする。	教員からの全体フィードバック 模擬患者、観察者からのフィードバック 自己の課題の明確化	演習	
8	対象理解および基礎知識の共有	対象の状況を理解し、援助計画を立案する。	対象理解 基礎知識の共有 アセスメントの基づく援助計画の立案	演習	

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
9	アセスメントに基づく対象への援助（治療編）①	個別性をふまえた援助を考 えることができる。	援助方法の検討とプレゼンテーション	演習	< 治療編で取り 入れる内容 > ①輸血 ②輸液ポンプ、 シリンジポンプ ③カテーテル類 が挿入されてい る、吸引が必要 な対象
10	アセスメントに基づく対象への援助（治療編）②	状況に応じた個別性のある 援助を実践を通して学ぶ。	対象への看護実践のシミュレーション 対象への援助を実践しながらよりよい介入を検討する 自己の看護実践を振り返る	演習	
11	アセスメントに基づく対象への援助（治療編）③	状況に応じた個別性のある 援助を実践を通して学ぶ。	対象への看護実践のシミュレーション 対象への援助を実践しながらよりよい介入を検討する 自己の看護実践を振り返る	演習	
12	アセスメントに基づく対象への援助（治療編）④	状況に応じた個別性のある 援助を実践を通して学ぶ。	対象への看護実践の発表	演習	
13	自己課題の明確化と まとめ	学びを意味づけし、自己の 課題を明確にする。	教員からの全体フィードバック 模擬患者、観察者からのフィードバック 自己の課題の明確化	演習	
14	看護計画立案	個別性と優先度を考慮した 援助計画の立案を理解する	個別性と優先度を考慮した援助計画の立案 看護計画立案 まとめ	演習	
15	パフォーマンス評価				

授業科目	地域・在宅看護論実習Ⅱ	学年	3学年
		単位	1
時期	前期		45時間
科目設定理由	<p>地域・在宅看護論実習Ⅱでは、地域で生活しながら療養する人とその家族を対象として「生活」に視点を置く。様々な生活の場で療養している対象を見ることで療養生活の理解や療養生活を支える様々な社会資源を学ぶ。また、スタッフと療養者との関わりを見ることや、自分自身でも対象と触れ合うことで、対象の尊重と自己決定権の尊重の重要性を理解する。</p> <p>在宅看護では、施設看護以上に対象との人間関係が重要となる。そのため、場の雰囲気に合わせて態度やマナーを守り、対象を尊重し人間関係を発展させるためのコミュニケーション技術を身につけることが重要である。</p> <p>訪問看護では、看護師が単独で看護を提供するため、より高度な判断能力・問題解決能力そして看護技術が必要である。訪問看護師に同行し共に援助を実施することで、個人の家庭を訪問して行う訪問看護の基本的態度と、看護の実際について学ぶ。更に、家族も含めた看護の必要性を理解する。また、ケアプランや対象が訪問看護に望むことが理解でき、在宅の特徴を踏まえ次回の訪問予定を考えられるようにする。訪問看護では2例のケースを大切に、記録に整理することで訪問看護の理解につなげる。</p> <p>これまでの実習・講義の学びから、地域包括ケアシステムの連携と看護師の役割、ケアマネジメントについて考え、在宅療養を支えている保健・医療・福祉の連携の必要性について学ぶ。</p>		
目的	地域で療養する人とその家族を理解し、療養生活に応じた看護を実践できる能力を養う。		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域で療養する人とその家族の特徴を理解し、統合体として健康状態を捉える。 2. 地域で療養する人とその家族の望む看護を、療養生活に応じた方法で実践する。 3. 信頼を得る倫理観をもち、誠実に看護を実践する能力を養う。 4. 地域で療養する人とその家族に対応するための、地域包括ケアシステムを理解する。 5. 看護の経験を通して、看護の意味づけができ、主体的に看護を探究する。 		
評価方法	実習評価表に基づく総合評価		
事前学習	介護保険法 障害者総合支援法 訪問看護ステーション 医療保険制度 訪問療養者に関する学習		
実習記録	共通記録用紙1：わたしの実習での取り組み用紙 共通記録用紙2：行動記録用紙 共通記録用紙3：対象理解用紙 地域・在宅看護論実習Ⅱ記録用紙①：利用者記録 地域・在宅看護論実習Ⅱ記録用紙②：生活の全体図 地域・在宅看護論実習Ⅱ記録用紙③：訪問記録 学びのレポート 評価表		
カンファレンス	在宅看護に関連する法律・制度のカンファレンス ケースカンファレンス「生活の全体図」 地域包括ケアシステムの連携と看護師の役割		

実習計画

	実習内容
1	実習初エンターション 情報収集 訪問看護に同行①
2	記録整理情報収集
3	記録整理 訪問看護に同行② 在宅看護に関連する法律・制度のカンファレンス
4	記録整理 ケースカンファレンス「生活の全体図」
5	記録整理 カンファレンス「地域包括ケアシステムの連携と看護師の役割」
6	実習評価

実習場所：太田訪問看護ステーションまたは熱海訪問看護ステーション（2件同行訪問する）

授業科目	老年看護学実習Ⅱ	学年	3学年
		単位	1
時期	前期		45
科目設定理由	<p>老年看護学実習Ⅱは、3年次前期に学ぶ実習である。健康障害を支える看護を学ぶ実習であり、同時期には母性、小児、精神、在宅の領域の実習、周術期や終末期の実習、看護過程実習をローテーションで進んでいく。</p> <p>学生は1年次に老年看護学実習Ⅰにおいて、地域で暮らす高齢者と関わり、その生活の実際と健康や成長発達を支える職種や環境、そして看護について体験から学んでいる。健康支援論及び成長発達支援論において、ライフステージにおける老年期を学び、人は生涯発達する存在であることを理解している。2年次には高齢者疑似体験を行い、実習や日常生活でみた高齢者の様子と理由を体感している。また、老年看護に求められる基本的姿勢や権利擁護、概念を学んでいる。さらに、高齢者の日常生活の援助や疾病をもつ高齢者の看護について学んでいる。実習及び授業を学びながら、老年期にある人生の先輩として尊重する姿勢を築いてきている。</p> <p>本実習は認知症をもつ高齢者の看護を実践できる能力を養う実習である。認知症という疾患を理解し、症状による生活の影響を理解すると共に、対象の変わらない本質もとめる力を捉える。高齢者の言動をもとにその人が困っていることに目を向け、対象の思いやニーズを捉える。加齢による変化や症状をふまえて、対象が安心して過ごせるためのコミュニケーション技術を身につける。また対象の意思表示の仕方を理解し、対象の意思を尊重する関わりを身につける。そして、対象らしい生活に向けて、もてる力を発揮できる環境調整を実践すると共に、対象を支えるチームの一員として自覚した行動を身につける。実習場面で感じた倫理的葛藤に向き合い、考え続ける力を育成する。認知症をもつ高齢者への看護を通して、看護を探究する力を養い、看護観を深める。</p>		
目的	認知症をもつ高齢者の看護を実践できる能力を養う		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 認知症をもつ高齢者を統合体として理解し、健康状態を捉えることができる 2. 対象らしい生活に向けた看護が実践できる 3. 認知症をもつ高齢者の尊厳を守るかわりができる 4. 対象らしい生活に向けた看護の役割と多職種の連携を理解し、チームの一員として行動できる 5. 臨床での体験をもとに看護を探究することができる 		
評価方法	実習評価表に基づく総合評価		
事前学習	老年期の発達課題 認知症の症状、治療、診断に必要な検査 認知症をもつ高齢者の看護・コミュニケーション ユマニチュア技法、パーソン・センタード・ケア、コンフォート理論 高齢者の権利擁護 認知症をもつ人と家族を支える制度・サービス		
実習記録	共通記録用紙1：わたしの実習での取り組み 共通記録用紙2：行動記録用紙 共通記録用紙3：対象理解用紙 共通記録用紙4：フローシート 共通記録用紙5：アセスメントと援助計画 共通記録用紙7：プロセスレコード 共通記録用紙9：実施記録 老年看護学実習Ⅱ記録用紙④：対象の全体像の理解 学びのレポート、評価表		
カンファレンス	高齢者の生活と認知症の影響について（1日目） 対象のもてる力について（2日目） プロセスレコード（3日目） 対象の言動から考察した対象の思いやニーズ（4日目） 高齢者の権利とジレンマについて（5日目） 実習での体験から看護を考える（6日目）		

実習計画

	実習予定	実習内容
1	病棟オリエンテーション 受け持ち開始	看護師と共に、対象の意思を確認しながら援助に参加する。 もてる力を意識し、対象が安心できるコミュニケーションや環境調整を行う。 日々の関わりを計画し、実践をリフレクションする。 過程の中で統合体として理解を深めていく。
2		
3	中間評価	
4		
5		
6	最終評価	

実習場所：あさかホスピタル 認知症治療病棟

太田熱海病院

授業科目	小児看護学実習Ⅱ	学年	3学年
		単位	1
時期	前期		45
科目設定理由	<p>1年次の小児看護学実習Ⅰ、母性看護学実習Ⅰにおいて、地域で生活する子どもとの関わりから、成長発達を理解、健康を支える職種や環境の実際について学んでいる。また、子どもにとっての「遊び」の意味や重要性を発達段階から考えることができている。病棟実習では、入院という非日常的な環境において、子どもが安全かつ安心して生活できる場を確保する必要があるため、発達段階に合わせた小児病棟の環境の工夫について学んだ。また、看護師の子どもと家族の関わりを見学を通して、成長発達および健康がどのように支援されているのかを学んでいる。さらに2年次には小児期に特徴的な疾病と治療、看護の講義を受け、基礎的なことは履修している。</p> <p>本実習では、小児とその家族の健康状態に応じた看護を実践できる能力を養う実習である。看護の対象である子どもの権利や倫理を様々な場面で考え、子どもを一人の人間として尊重していく姿勢を深め、小児看護の果たす役割を学ぶ。よって、病棟実習を5日間設け、入院を余儀なくされた子どもとその家族が受ける入院の影響や治療・症状、社会的側面の変化を様々な反応や言動から捉え、対象理解につなげる。また、本来のその子どもの状態を考慮しながら、子どもの頑張る力を引き出すために何が必要か考え、子どもの意思決定を支援した看護を実践していく。さらに疾患や障害を持ちながら成長発達していく子どもや家族に対して、対象らしい生活を支えるために保健・医療・教育・福祉がどのように連携しているのか、小児科外来、特別支援学校の役割について実習を通して学ぶ。</p> <p>そして、看護チームの一員として自分の考えをもとに提案できる力や主体性をもち、多職種連携と協働を体感する。小児看護の経験を通して、看護を探究する力を養い、看護観を深める。</p>		
目的	小児とその家族の健康状態に応じた看護を実践できる能力を養う		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 小児期にある対象を理解し、統合体として健康状態をとらえる。 2. 対象の成長発達および健康状態に応じた看護の実践ができる 3. 小児看護の対象を尊重し、倫理観に基づいた看護を実践できる。 4. 子どもの健やかな成長発達に向けた看護の役割と多職種連携を理解し、看護チームの一員として行動できる。 5. 看護の経験を通して看護の意味づけができ、主体的に看護を探究する。 		
評価方法	実習評価表に基づく総合評価		
事前学習	各自で必要な事前学習を行う 小児に特徴的な疾患と看護 小児看護技術（VS測定、与薬） 小児における社会資源と法律 主な理論（パウロビイの愛着理論、ピアジェ認知発達理論）		
実習記録	共通記録用紙1：私の実習での取り組み 共通記録用紙2：行動記録用紙 共通記録用紙3：対象理解用紙 共通記録用紙4：フローシート（小児） 共通記録用紙5：アセスメントと援助計画 共通記録用紙6：関連図 共通記録用紙9：実施記録 小児看護学実習Ⅱ記録用紙①：支援学校実習記録用紙 小児看護学実習Ⅱ記録用紙②：外来実習記録用紙 学びのレポート、評価表		
カンファレンス	入院による子どもと家族の生活への影響を考える：病棟2日目 ケースカンファレンス（病態生理をふまえ、全体像）：病棟3日目 対象に合わせた援助の実践：病棟4日目 対象らしい生活を支える多職種との協働から、看護師の役割を考える（外来実習、支援学校実習の学びも含む）：病棟最終日		

実習計画

	実習内容
1	支援学校実習（1日）
2	病棟オリエンテーション、受け持ち開始 看護師と共に援助
3	日々援助の実践、リフレクション
4	ケースカンファレンス（関連図を用いて全体像、方向性）
5	
6	実習評価

実習場所：須賀川支援学校郡山校（1日間）

病棟実習：太田西ノ内4B病棟5日間、小児科外来（午前または午後の2時間）

授業科目	母性看護学実習Ⅱ	学年	3学年
		単位	1
時期	前期	時間	45
科目設定理由	<p>本実習では、周産期にある女性とその子を受け持ち、妊娠・出産を経て、母子が新しい生活に適応できるように援助することを学ぶ。1年次母性看護学実習で産婦人科の医療施設や地域の子育て支援施設にて、地域における子どもを生き育てる看護について、学んだ。本実習では、周産期にある対象との関わりから、退院後の母子の生活を支える援助の実際を学ぶ。</p> <p>妊娠、分娩は生理的な経過であり、健康な営みであることを認識し、講義で学んだ知識とウェルネスの視点からセルフケアへの援助の重要性を理解する必要がある。また、母子は常に密接な関係にある。母と子の二つの生命を守ることが看護の重要な役割である。母子の心身の相互作用を見つめ、双方へ援助を行い、より良い母子関係が形成されるよう看護していく必要がある。母子関係の形成には家族の協力が必要であるため、家族も看護の対象である。</p> <p>本実習を通して生命の誕生や、無事に生まれ健康に育つことを願う対象と家族を理解する。新生児に対しては、一人の人格をもつ対象として尊重し、訴えられないからこそ緻密な観察と愛情をもって関わることを学ぶ科目である。</p>		
目的	周産期と新生児期にある対象の看護を実践できる能力を養う		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対象である、妊婦・産婦・褥婦・新生児の特徴を理解し、統合体として健康状態を捉え、理解する 2. 妊婦・産婦・褥婦・新生児の経過にあった看護の実践ができる 3. 対象を尊重する姿勢を持ち、看護師としての倫理的行動ができる 4. 周産期にある対象が子どもを生き育てていくためのチーム医療・他職種との連携について理解する 5. 看護の経験を通して、看護の意味づけができ、主体的に看護を探究する 		
評価方法	実習評価表に基づく総合評価		
事前学習	<p>実習に必要な学習を各自行なう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周産期における母性看護技術 ・妊婦健診、周産期に必要な保健指導 ・産褥2週間健診、産後1か月健診 ・主な理論(ルービン、クラウス・ケネル、ボウルビィ、オレム) 		
実習記録	<p>共通記録用紙 1：わたしの実習での取り組み</p> <p>共通記録用紙 2：行動記録用紙</p> <p>共通記録用紙 3：対象理解用紙</p> <p>共通記録用紙 5：アセスメントと援助計画</p> <p>共通記録用紙 6：関連図</p> <p>共通記録用紙 7：プロセスレコード</p> <p>共通記録用紙 9：実施記録</p> <p>母性看護学実習Ⅱ記録用紙 1：受け持ち実習フローシート</p> <p>評価表、学びのレポート</p>		
カンファレンス	受け持ち状況に応じてケースカンファレンスとプロセスレコードカンファレンスを実施する。		

実習計画

	実習内容
1	病棟オリエンテーション 情報収集・分析 看護師とともに援助
2	看護師とともに援助
3	<p style="text-align: center;">↓</p> <p>*受け持ち対象者が決まり次第、受け持ち実習開始</p> <p>受け持ち対象者がいない日は看護師と共にチームの中で行動</p>
4	
5	
6	
	評価面接

実習場所： 一般財団法人太田総合病院附属 太田西ノ内病院（4C病棟）

授業科目	精神看護学実習Ⅱ	学年	3 学年
		単位	1
時期	前期		45
科目設定理由	<p>本実習は3年次に各看護学領域と同時期にローテーションで行われる。1年次では、精神看護学実習Ⅰで、地域で暮らす人のこころの健康維持や包括的な支援の実際を学んだ。2年次では、疾病と治療Ⅶで精神疾患の病態と治療の理解を深め、精神看護学でストレングス、レジリエンスをもとに対象が持つ可能性、生きにくさ、生活上の困難を理解し、今後の生活を見据えリカバリーに向けた支援、対人関係を基盤としたこころの健康状態に応じた看護の重要性を学んだ。</p> <p>本実習は、こころの健康状態に応じた看護を実践できる能力を養う実習である。患者の自己実現に向け、地域生活に必要なセルフケア向上への看護を実践する力を身につける。継続的支援と精神保健医療福祉の連携、協働の重要性、看護の役割を考え、自己の看護観を深める。実習では、1人の患者を受け持ち、オレム－アンダーウッドのセルフケアモデルを用いて必要な看護を考える。価値観や日々営まれる暮らしを尊重し、リカバリーを支えるための看護を実践する。ストレングス、症状、治療、精神状態と日常生活への影響、成長発達課題、心情面の変化などからセルフケア能力をアセスメントする。目標を明らかにし、患者が主体となってその人らしく生きるために必要な援助を考え実践を省察する。関係構築の過程において症状や生きにくさを踏まえ、言葉や表情の背後にある意図や思いを考え、また自己の傾向を洞察し意図的なコミュニケーションの必要性を考える。看護の実践を通してこころの健康状態に応じた看護を考え、精神看護についての理解を深める。</p>		
目的	こころの健康状態に応じた看護を実践できる能力を養う		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 統合体として対象のこころの健康状態をとらえる 2. 対象のこころの健康状態とセルフケアの力を踏まえ、回復に向けた看護の実践ができる 3. 対象との人間関係を発展させる過程から自分自身を洞察できる 4. 対象の回復に向けた看護の役割と多職種との連携を認識し、チームの一員として行動できる 5. 臨床での実践を通して、看護の意味づけができ、主体的に看護を探究する 		
評価方法	実習評価表に基づく総合評価		
事前学習	<p>実習に必要な学習を各自行う</p> <p>精神科で多い疾患の症状・治療・看護、心理検査</p> <p>理論の活用（オレム－アンダーウッドのセルフケアモデル、ストレングスモデル、ペプロウの人間関係論、発達理論）精神保健福祉に関連する法律</p>		
実習記録	<p>共通記録用紙1：わたしの実習での取り組み</p> <p>共通記録用紙2：行動記録用紙</p> <p>共通記録用紙3：対象理解用紙</p> <p>共通記録用紙4：フローシート</p> <p>共通記録用紙5：アセスメントと援助計画</p> <p>共通記録用紙6：プロセスレコード</p> <p>精神看護学実習Ⅱ記録用紙①：基本的条件付けの要因</p> <p>精神看護学実習Ⅱ記録用紙②：普遍的セルフケア要素</p> <p>精神看護学実習Ⅱ記録用紙③：リカバリーに向けた支援</p>		
カンファレンス	<p>全体像とリカバリーに向けた支援（3日目）</p> <p>プロセスレコードカンファレンス（4日目）</p> <p>リカバリーに向けた援助の実践（5日目）</p>		

実習計画

	実習内容
1	実習オリエンテーション 受け持ち開始
2	看護師と共に援助
3	セルフケア能力のアセスメント
4	全体像の把握とリカバリーに向けた支援の検討
5	リカバリーに向けた援助の実施 リフレクション
6	リカバリーに向けた援助の実施 リフレクション

実習場所：あさかホスピタル 精神科専門病棟

実習時間：45時間すべて臨地実習

授業科目	救急看護	学年	3学年
		単位	1
時期	前期	時間	30
科目設定理由	救急処置に始まる救急看護は、救急外来にとどまらず、プレホスピタルでの活動、災害急性期の看護、一般市民への救急処置など役割が拡大・深化が進んでいる。そのため救急看護はすべての看護職が学ぶべきものであると言える。本科目では、救急看護の基礎から臨床実践へと応用するための知識と技術について学ぶ。		
目的	救急看護の基礎から臨床実践へと応用するための基本的知識と技術について学ぶ。		
目標	1.救急医療の概念・現状と看護師の役割について理解する 2.救急医療を必要とする患者の特徴について理解する 3.救急看護の実際について理解する 4.心肺蘇生と生命維持の実際について理解する		
評価方法	筆記試験		
使用テキスト	<系統看護学講座>別巻・救急看護学：医学書院		
参考図書			

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
1	救急看護とは	救急看護の特徴と看護の場、救急看護の対象について理解する	救急看護の概念 救急看護の対象の理解	講義	
2	救急看護体制と看護の展開	救急医療・集中治療における看護の概要について理解する。	初期・第二次救急医療・第三次救急医療における対応 院内急変時・在宅療養・学校保健における対応 救急患者のトリアージ	講義	
3	心肺停止状態への対応	心肺停止状態への対応を理解する。	一次救命処置（BLS） 二次救命処置（ALS） 小児の心肺蘇生	講義	
4	心肺停止状態への対応②	一時救命処置（BLS）が実施できる。	演習：状況に応じた一時救命処置（BLS）の実際	演習	
5	人工呼吸療法①	人工呼吸療法について理解する。	人工呼吸療法 人工呼吸器の設定方法 人工呼吸器使用の流れ 加温・加湿器と人工鼻		
6	人工呼吸療法②	人工呼吸中のモニタリング、管理について理解する。	人工呼吸中のモニタリング、パルスオキシメーター		
7	意識障害への対応 呼吸障害への対応	意識障害のある患者の初療時の看護が理解できる 呼吸障害のある患者の初療時の看護が理解できる	意識障害とは、意識障害時の救急処置・看護 てんかん 呼吸障害とは、呼吸障害時の救急処置・看護 窒息	講義	
8	ショック・循環障害への対応	ショック・循環障害のある患者の初療時の看護が理解できる	ショックとは、ショックをきたす要因と疾患、ショック・循環障害時の救急処置と看護、咬傷の対応	講義	
9	体温異常への対応	体温異常のある患者の初療時の看護が理解できる	熱中症・悪性高熱症・低体温症とは、救急処置と看護 溺水への対応	講義	
10	外傷への対応	外傷患者の初療時の看護が理解できる	外傷とは、外傷時の救急処置と看護 刺傷、止血法、創傷処置	講義	
11	熱傷への対応	熱傷患者の初療時の看護が理解できる	熱傷とは、熱傷時の救急処置と看護	講義	

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
12	中毒への対応	中毒患者の初療時の看護が理解できる	中毒とは、中毒時の救急処置と看護 胃管挿入、胃洗浄	講義	
13	精神症状への対応、 緊急事態への対処	精神症状への対応、自殺暴力無断離院への対処と予防が理解できる	精神症状があるときの救急処置 精神症状がある患者の初診時の看護 自殺暴力無断離院への対処と予防	講義	
14	救急時の看護技術	救急時の対応が理解できる	救急患者の搬送の実際、止血法・創傷処置の実際	演習	
15	テスト				

授業科目	終末期看護	学年	3学年
		単位	1
時期	前期～後期	時間	30
科目設定理由	医療の進歩や発展の一方で、悪性腫瘍であるがんは年々増加傾向にあり、現在2人に1人が罹患すると言われている。がんを患い人生の終末期を迎える対象者の生活や健康支援は、重要な状況にある。また、我が国は高齢化が進行し、世界に先駆けて超高齢社会となっている。超高齢社会は多死社会の到来を意味し、緩和ケアや尊厳ある看取りなど終末期看護がこれまで以上に重要視されている。人生の最終段階における医療・ケアがどのように行われているのか、対象の気持ちに寄り添い、最後までその人らしく生を全うできるような全人的な医療の提供や苦痛の緩和、生活の質が高まるような看護について学ぶ。そして、生命の尊厳や生きる意味、その人にとってのよりよい生活について考える機会とする。		
目的	終末期にある対象者の全人的苦痛を緩和するために行われる医療や看護について学ぶ		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1.終末期看護の特徴について理解する。 2.緩和ケアについて理解する。 3.全人的ケアの実践について理解し、援助として実施できる。 4.終末期における対象を支える人のケアについて理解する。 5.思春期・若年成人・周産期における終末期看護について理解する。 6.小児における終末期看護について理解する。 7.成人期・高齢者における終末期看護について理解する。 8.地域療養者の終末期看護について理解する。 9.臨死期の特徴と必要なケアについて理解する。 10.エンゼルケアについて理解し、ケアとして実施できる能力をもつ。 		
評価方法	筆記試験、課題		
使用テキスト	<系統看護学講座 別巻>緩和ケア：医学書院 <系統看護学講座 別巻>がん看護学：医学書院		
参考図書			

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
1	終末期の特徴と緩和ケア	終末期の特徴と緩和ケアについて理解する	終末期の特徴、終末期医療と看護の機能・役割 緩和ケアにおけるチームアプローチの意義 エンド-オブ-ライフ-ケア	講義	
2	緩和ケアにおけるコミュニケーション	緩和ケアにおけるコミュニケーションと倫理的課題について理解する	求められる専門性 メンバーシップとコミュニケーション アドバンス-ケア-プランニング 倫理的課題	講義	
3	全人的ケア1	身体的ケア、苦痛のマネジメントについて理解する	死にゆく過程と死にゆく人への関わり 身体的苦痛と身体的ケア	講義	
4	全人的ケア2	心理的・社会的特徴と関わりについて理解する	心理的苦痛と社会的特徴	講義	
5	全人的ケアの実践1	日常生活の援助について理解することができる	身体的ケア 疼痛コントロール 日常生活を支える援助	講義	
6	全人的ケアの実践2	心理的・社会的ケアとスピリチュアルケアについて理解する	心理的ケア 精神状態のアセスメント おもな精神症状と対応 社会的ケア 暮らしのなかの多様な支援 疾患・障害をもつ療養者の暮らしの支援 スピリチュアルケア スピリチュアルペイン スピリチュアルケアの実践	講義	
7	臨死期のケア	臨死期の特徴と必要なケアについて理解する	臨死期の概念とケアの目標、臨死期における全人的苦痛の緩和、死亡前後のケア、急変時のケア	講義	

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
8	エンゼルケア1	エンゼルケアについて理解し、ケアとして実施することができる	エンゼルケアの目的、留意点、方法	講義	
9	エンゼルケア2		臨死期のケア	演習	
10	終末期における対象を支える人のケア	家族、医療スタッフのケア	家族ケアとグリーフケア 医療スタッフのケア	講義	
11	小児における終末期看護	小児における終末期看護について理解する	終末期にある子どもと家族の看護	講義	
12	思春期・若年成人・周産期における終末期看護	思春期・若年成人・周産期における終末期看護について理解する	思春期・若年成人における終末期看護 周産期における対象の終末期看護 流産・死産におけるグリーフケア	講義	
13	成人期・老年期における終末期看護	成人期・老年期における終末期看護について理解する	終末期にある成人期の人の看護 終末期にある老年期の人の看護 終末期にある地域療養者の看護	講義	
14	地域療養者の終末期看護	地域療養者の終末期看護について理解する		講義・演習	課題
15	テスト				

授業科目	看護管理	学年	3 学年
		単位	1
時期	前期～後期	時間	30
科目設定理由	看護は対象者への援助であり、多くの場合継続性を必要とし、一人の看護師だけで対象者のニーズを満たすことは難しい。看護サービスを提供するためには、看護師同士の協働、多職種との連携、そして対象者自身や家族の協力とともに対象者を取り巻くあらゆる資源を十分に活用することが必要となる。つまり、看護を提供できる知識と技能をもった人的資源、看護を提供するための環境や医療用機器などの物的資源および財的資源が必要である。これらを有効利用できるよう維持・活用するしくみが看護管理である。チームや組織をつくり、動かしていくことは管理者だけの仕事ではなく、ケアを提供しているすべての看護師が担う役割でもある。よって、看護を管理（マネジメント）できる基礎的知識を学び、看護実践に活かせるようにする。		
目的	医療チームの一員として看護サービスを行うための看護管理、安全な看護を提供するための医療安全、感染管理を学ぶ。		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1.看護におけるマネジメントを理解する。 2.マネジメントに必要な知識と技術を理解する。 3.看護を取り巻く諸制度について理解する。 4.人間の特性と事故防止の考え方について理解する。 5.診療の補助における事故防止について理解する。 6.療養上の世話における事故防止について理解する。 7.看護師の労働安全衛生上の事故防止と医療安全対策について理解する。 8.感染管理に関する関係法規と感染管理組織について理解する。 9.標準予防策と感染経路別予防策の実際について理解する。 		
評価方法	筆記試験(看護管理35点、医療安全35点、感染管理30点)		
使用テキスト	<系統看護学講座統合分野>看護管理：医学書院 <系統看護学講座統合分野>医療安全：医学書院 <系統看護学講座専門分野>基礎看護技術Ⅰ：医学書院 <系統看護学講座専門分野>基礎看護技術Ⅱ：医学書院 <系統看護学講座統合分野>災害看護・国際看護：医学書院		
参考図書			

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
1	看護におけるマネジメント	看護におけるマネジメントと看護職の機能について理解する	看護におけるマネジメント 看護ケアのマネジメントと看護職の機能	講義	
2	看護ケアのマネジメントと安全管理、チーム医療	看護ケアのマネジメントと安全管理、チーム医療について理解する	看護ケアのマネジメントと安全管理、チーム医療 看護業務の実践（日常業務のマネジメント）	講義	
3	看護職のキャリアマネジメント、看護サービスのマネジメント	看護職のキャリアマネジメントと看護サービスのマネジメント	看護職のキャリアマネジメント 看護サービスのマネジメント	講義	
4	看護マネジメントに必要な知識と技術	組織とマネジメントについて理解する	組織とマネジメント	講義	
5	看護を取り巻く諸制度	看護を取り巻く諸制度について理解する	看護を取り巻く諸制度	講義	
6	人間の特性と事故防止の考え方	人間の特性と事故防止の考え方について理解する	医療安全の取り組み ヒューマンエラー 事故防止の考え方	講義	
7	診療の補助の事故防止 1	診療の補助の事故防止について理解する	診療の補助の事故防止 与薬（経口、注射、輸血）	講義	
8	診療の補助の事故防止 2	診療の補助の事故防止について理解する	診療の補助の事故防止 経管栄養 チューブ管理	講義	

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
9	療養上の世話の事故防止	療養上の世話の事故防止を理解する	療養上の世話の事故防止 転倒、転落 窒息、誤嚥 異食 入浴中の事故	講義	
10	労働安全衛生上の事故防止と医療安全対策	労働安全衛生上の事故防止と医療安全対策について理解する	看護師の労働安全衛生上の事故防止 薬剤の曝露防止 放射線曝露 ラテックスアレルギー 院内暴力 医療安全対策 業務領域をこえて共通する間違いと発生要因 医療安全とコミュニケーション 組織的な安全管理体制への取り組み	講義	
11	感染管理（関係法規、感染管理組織）	感染管理に関連する関係法規と感染管理組織について理解する	感染管理に関する関係法規 感染管理組織と看護師	講義	
12	感染管理の実際（標準予防策1）	標準予防策の実際について理解する	感染管理の実際 病棟内での心構え 標準予防策、防護用具の着脱、針刺し予防 職業感染	講義	
13	感染管理の実際（標準予防策2）	標準予防策の実際について理解する	感染管理の実際 標準予防策、カテーテル関連感染予防	講義	
14	感染管理の実際（感染経路別予防策）	感染経路別予防策の実際について理解する	感染管理の実際 感染経路別予防策 看護ケアと感染対策 国際的な感染対策（世界の三大感染症）	講義	
15	テスト				

授業科目	災害・国際看護	学年	3 学年
		単位	1
時期	前期～後期	時間	15
科目設定理由	人間が暮らす自然はときとして猛威をふるい、人々の命や健康を奪い、社会機能や日常生活に支障をきたす。自然災害の他、列車や航空機事故などのように人為災害もある。これら災害の被害は、被災国の医療体制や保健衛生状態が悪いほどその規模が大きくなるため、世界の国々に関心をもち、国際協力開発を進めることが重要である。他国への災害救援を行う場合は、その国の情勢を十分に把握し、その国の人々を尊重したケアを行う必要がある。このようにグローバルな視野をもち、災害看護学と国際看護学をともに学んでいく。		
目的	災害看護では、災害において人々の命と生活を守る看護の知識と技術を学ぶ。また、国際看護では海外の看護の現状や課題を知り、グローバルな視野で国際的な看護の基礎的知識を学ぶ。		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1.災害直後から支援できる看護の基礎的知識を理解する。 2.被災者特性に応じた災害看護について理解する。 3.災害における応急処置と救急搬送ができる。 4.国際看護学の概念について理解する。 5.国際看護活動の現状について理解する。 6.国際救援と看護、今後の課題について理解する。 		
評価方法	筆記試験		
使用テキスト	<系統看護学講座統合分野>災害看護学・国際看護学：医学書院		
参考図書			

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
1	災害看護の基礎知識	災害看護の基礎知識と災害サイクルに応じた各期の看護について理解する	災害看護の基礎知識 災害サイクルに応じた活動現場別の災害看護 急性期・亜急性期 災害直後の対応 避難所での看護 慢性期・復興期 応急仮設住宅での生活支援 復興期における看護 静穏期 防災、減災へ向けた整備	講義	
2	被災者特性に応じた災害看護 1	被災者特性に応じた災害看護について理解する	被災者特性に応じた災害看護 子どもに対する災害看護 妊産婦に対する災害看護 高齢者に対する災害看護 障害者に対する災害看護 慢性疾患をもつ地域療養者に対する災害看護	講義	
3	被災者特性に応じた災害看護 2	被災者特性に応じた災害看護について理解する	被災者特性に応じた災害看護 災害とこころのケア	講義	
4	災害における応急処置と救急搬送	災害における応急処置と救急搬送を実施する	災害における健康被害 トリアージ 応急処置と救急搬送（演習）	演習	
5	国際看護学の概念	国際看護学の概念としくみについて理解する	国際看護学とは 近年の世界における災害と難民、国内避難民の現状 グローバルヘルス 国際協力のしくみ 国際救援活動の基本理念 今後の国際協力の課題 SDGS	講義	

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
6	国際看護活動の現状	国際看護活動の現状について理解する	国際看護活動の実際 国際看護活動の展開過程 開発途上国と看護	講義	外部講師
7	国際救援と看護、今後の課題	国際救援と看護、今後の課題について理解する	国際救援と看護 国際的な災害救援および復興支援にかかるガイドライン 近年の特徴的な災害・紛争救援活動の概要 国際救援における看護の展開 文化を考慮した看護、在留外国人への看護の実践	講義	
8	テスト				

授業科目	総合演習Ⅰ（看護理論）	学年	3 学年
		単位	1
時期	前期～後期	時間	30
科目設定理由	総合演習Ⅰでは、これまで学習や実習での学びをふまえ、既習の看護理論を用いて自分の看護をまとめる。ケーススタディとして自分の看護実践をもとに事例研究し、看護について考察する。さらにケーススタディ発表会を通して、全体で看護に対する考えを深める。また、3年間の学びの集大成として、これまでの臨地実習で深めてきた自己の看護観をまとめる。ケーススタディも看護観も一貫した論理的なまとめになるように、教員の指導助言のもと自分の考えを表現する。看護の経験を通して、理論を活用した意味づけを行い、自己の看護観を深める機会とする。		
目的	看護の経験を通して、看護の意味付けができ、自己の看護観を深める		
目標	1.ケーススタディに取り組み、自分の看護について思考する。 2.看護に対する考えを深める。 3.看護の理論を活用して看護について探求する。 4.自己の看護観を深め自己の「看護観」をまとめる。		
評価方法	パフォーマンス評価（ケーススタディ70点、看護観30点）		
使用テキスト	<系統看護学講座専門分野>看護学概論：医学書院 <系統看護学講座 別巻>看護研究：医学書院 看護のためのわかりやすいケーススタディの進め方：照林社		
参考図書	<系統看護学講座 別巻>看護情報学：医学書院		

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
1	ケーススタディ 研究計画書、はじめに	ケーススタディの意義を理解し、目的・方法を明確にする	ケーススタディとは ケーススタディの構成と各項目の記述方法 ケーススタディ研究計画書	講義・演習	
2	ケーススタディ 倫理的配慮、患者紹介、看護の実際	得られた情報から必要な情報を選択し、患者紹介、看護の実際、倫理的配慮を記述する	倫理的配慮の記載 患者紹介と看護の実際のとめ方	講義・演習	
3	ケーススタディ 実施と結果	実施と結果を研究目的に沿って記述し、見直す	看護の実際と結果のまとめ方の確認	講義・演習 指導	3・4回目は連続的に実施
4			看護の実際と結果まで適切に記述されているか、指導を受けながら見直し、まとめる		
5	ケーススタディ 考察	得られた結果を解釈・意味づけし、考察をまとめる	実施結果の解釈・意味付け、文献の活用	講義・演習 指導	5・6回目は連続的に実施
6			考察として実践したことを振り返り、指導を受けながら見直し、まとめる。		
7	ケーススタディ おわりに、謝辞 全体のまとめ	ケーススタディで明らかになったことや得られた学びをまとめる	「おわりに」のまとめ方、謝辞の記載 「表題」のつけ方	講義・演習 指導	7・8回目は連続的に実施
8		ケーススタディの構成に従って全体を見直す	ケーススタディの構成に従って文章化したものの一貫性、論理性を振り返り、指導を受けながら見直す。 ケーススタディの目的が達成されたか、ケーススタディの意義を振り返る。		
9	ケーススタディ 発表会	ケーススタディ発表で、看護についての考えを述べられる。発表会を通して看護についての考えを深める。	ケーススタディで得られた学びを、学内で発表する。	ケーススタディ発表会	9・10回目は連続的に実施
10			発表形式に則り自分の考えが他者に伝わるように発表する 互いの発表を聞くことで、自分の看護についての考えを深める。		
11	看護を考える	看護について考え、表現する	看護に対する自分の考えを言語化する	講義・演習	
12	看護理論	看護理論についての理解	自分の考える看護に近い看護理論家の主要概念をまとめる。	講義・演習	
13	看護観作成・指導	自分の看護観をまとめる 1	領域別臨地実習において、自身の看護に対する考えをまとめ、指導を受けながら見直す。	演習 指導	
14	看護観作成・指導	自分の看護観をまとめる 2	看護学校最後の実習「看護の統合と実践実習Ⅳ」において自分の看護観を論理的にまとめ、指導を受けながら見直し、仕上げる。	演習 指導	14・15回目は連続的に実施
15					

授業科目	総合演習Ⅱ（多重課題と臨床判断）	学年	3 学年
		単位	1
時期	前期～後期	時間	30
科目設定理由	総合演習Ⅱでは、これまでの講義や演習、実習で学んだこと、経験してきたことを活かし、実際の臨床現場で起こり得る状況設定下で看護師に求められる思考・判断、行動ができるようシミュレーションによる演習を行い、看護技術の総合的な評価を行う。臨床では患者の急変など緊急事態が発生した際のタイムプレッシャーや過緊張にさらされる状況、また、複数の患者のニーズによる同時業務や割り込み業務の発生で多重課題に直面し、業務途中の中断など注意が分散する状況がある。多重課題がある場面で何を優先すべきか迷いや焦りを感じつつ考え、判断し、どう行動していくか、個人思考・グループ思考を繰り返す。失敗が許される安全な学習環境下でじっくり考え、実践する過程では、自分の理解や思考、行動の理由を言葉や行動で外化し、ディスカッションによりさらにより対応を考えていく。後半は状況設定問題を解きながら様々な状況における判断ができるよう知識の強化を図る。		
目的	看護実践において、適切な判断・対応ができるよう、既習の知識・技術を活用して実践的な看護を学ぶ。		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1.さまざまな状況下にある対象に応じた看護について学んだ知識・技術・態度を統合する。 2.多重課題、タイムプレッシャー発生時の対応が実践できる。 3.緊急時の対応が実践できる。 4.複数の患者に対する適切な対応ができる。 5.臨床判断能力の必要性について理解を深める。 6.自己の傾向を踏まえ、看護実践における今後の課題を考える。 		
評価方法	パフォーマンス評価（演習70点、状況設定下における臨床判断30点）		
使用テキスト	<系統看護学講座専門分野>基礎看護技術Ⅰ：医学書院 <系統看護学講座専門分野>基礎看護技術Ⅱ：医学書院		
参考図書	<系統看護学講座統合分野>看護管理：医学書院		

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
1	多重課題における事例検討、状況把握	紙上事例における多重課題の状況を理解する	臨床判断能力について タイムプレッシャー、同事業務、割り込み業務、業務中断など 多重課題がある場面の状況を理解する 事例に関する自己学習	講義・個人学習	
2	多重課題の対応	多重課題の対応を考える	知識の確認テスト 設定された多重課題に対する対応について、個人思考、グループ思考する	知識の確認テスト グループワーク	
3	多重課題の対応の実際1	多重課題への対応を実践する1	多重課題への対応をグループで実践する。	演習	実習室
4	多重課題の対応の実際2	多重課題への対応を実践する2	多重課題への対応について、行動の根拠を明確にできるよう、役割を交換しながらさらに検討する。	演習	実習室
5	多重課題デブリフing1	多重課題への適切な対応を検討する	グループで発表 2グループが組みになり、互いに行動の根拠を伝えながら丁寧に実践する。 より良い対応についてディスカッションする。	演習	実習室 (5回目・6回目連続)
6	多重課題デブリフing2	多重課題への適切な対応を検討し、実践する	グループ発表・デブリフingを通して、より良い対応を実践する。	演習	
7	緊急時の対応	緊急時の対応を考える	設定された緊急時の対応について、個人思考・グループ思考する	グループワーク	実習室
8	緊急時の対応の実際	緊急時の対応を実践する	緊急時の対応をグループで実践する。	演習	実習室

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
9	緊急時デブリーフィング1	緊急時への適切な対応を検討する	グループで発表 2グループが組みになり、互いに行動の根拠を伝えながら丁寧に実践する。 より良い対応についてディスカッションする。	演習	実習室 (9回目・10回目 連続)
10	緊急時デブリーフィング2	緊急時への適切な対応を検討し、実践する	グループ発表・デブリーフィングを通して、より良い対応を実践する。	演習	
11	臨床判断のまとめ	臨床判断能力の必要性について理解を深める	求められる臨床判断能力と看護実践 事例において臨床判断モデルをもとに考える 気づく、解釈する、反応する、省察する	ワーク・講義	
12	複数受け持ち時の計画立案 多重課題とコミュニケーション	複数受け持ち時の計画立案について理解する 多重課題の際のコミュニケーションの重要性について理解する	多重課題とは 看護の実際 優先順位の考え方 多重課題への対応 事前の準備、タイムスケジュール、患者ごとの看護計画、チーム内での調整、予測出来ない状況への対応、SBAR 自分の傾向を考える 患者の安全を守るために大切なこと	ワーク・講義	
13	状況設定下における臨床判断1	状況設定から適切な臨床判断を行う1	状況設定問題トレーニング 状況設定下における臨床判断について状況設定問題をもとに取り組む1	ワーク・講義	
14	状況設定下における臨床判断2	状況設定から適切な臨床判断を行う2	状況設定問題トレーニング 状況設定下における臨床判断について状況設定問題をもとに取り組む2	ワーク・講義	
15	状況設定下における臨床判断3	状況設定から適切な臨床判断を行う3	状況設定問題トレーニング 状況設定下における臨床判断について状況設定問題をもとに取り組む3	ワーク・講義	

授業科目	総合演習Ⅲ（多職種連携）	学年	3 学年
		単位	1
時期	後期	時間	15
科目設定理由	総合演習Ⅲでは、看護だけではなく様々な職種の連携とチーム医療について学習する。患者1人ひとりに高度な医療や質の高いケアを提供するために、多くの職種が携わり、各専門職がそれぞれの専門性で対応している。各専門職がチームを組んで対象となる方の情報と目標を共有し、互いに連携・補完しあうことが大切であり、看護師はこれらの職種をつなぐ重要な役割をもつ。対象の状態や生活の様子を日々近くで観ている看護師が中心となり、多職種と情報を共有し、各専門性を活かせるように相談・調整しながら対象のより良い生活を支援していく。この科目では栄養士、薬剤師、理学療法士、社会福祉士、医師、看護師（看護学生）の各専門職の役割について確認しながら、連携の意義や方法、看護師の役割について学ぶ。		
目的	対象者の健康を守り支援する同じ目的のために、医療の専門職がそれぞれの専門性を発揮して協働する多職種連携とチーム医療について学ぶ。		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1.医療におけるさまざまな専門職とその役割について理解する 2.チーム医療と職種の連携の意義や方法について理解する 3.多職種カンファレンスの意義や方法について理解する 4.退院を見据えた患者の退院調整会議を企画する 5.患者のQOLの向上をめざし、各専門性を発揮した意見交換ができるよう退院調整会議を進行する 6.退院調整会議を通して、多職種連携やチーム医療についての学びをまとめる 		
評価方法	パフォーマンス評価、課題提出		
使用テキスト			
参考図書	<系統看護学講座専門分野>看護学概論：医学書院 <系統看護学講座統合分野>看護管理：医学書院		

	主題・単元	授業のねらい	授業内容	授業方法	備考
1	人々の健康を支える職業	人々の健康を支えるさまざまな専門職について理解する	医療におけるさまざまな専門職とその役割	講義	
2	チーム医療、コミュニケーション	チーム医療とコミュニケーションの意義について理解する	チーム医療と職種の連携 多職種カンファレンス	講義	
3	退院調整会議	退院調整会議について理解する	退院調整会議の目的、方法、看護師の役割について考える	講義・演習	退院調整看護師の講義
4	退院調整会議の企画1	退院調整会議を企画する1	退院調整会議について、各視点の目標、進行方法、調整・依頼内容、質問事項などについて考える	講義・演習	
5	退院調整会議の企画2	退院調整会議を企画する2	退院調整会議について、各視点の目標、進行方法、調整・依頼内容、質問事項などについて考える	講義・演習	
6	退院調整会議の実施1	退院調整会議を実施する1	退院後、患者がより良い生活を送れるようそれぞれの専門職がそれぞれの立場で述べられるよう会議を進行する	演習	6・7回目は連続的に実施
7	退院調整会議の実施2	退院調整会議を実施する2	患者のQOLの向上を目指し、建設的な意見交換ができるよう会議を進行する		
8	まとめ	退院調整会議を振り返りまとめる	退院調整会議を通して、多職種連携やチーム医療についての学びをまとめる。	演習・講義	

授業科目	看護の統合と実践実習Ⅰ（周術期の看護）	学年	3 学年
		単位	1
時期	前期	時間	45
科目設定理由	<p>本実習は周術期の看護を学ぶ3年次前期の実習である。学生は2年次成人看護学実習Ⅱで手術室・SICUなど9か所で、健康状態の回復促進や悪化予防等、治療に応じた看護を学んでいる。手術室実習では手術室の環境のほか手術見学にも入り、手術という外科的な治療や手術室での職種連携について学んだ。SICUでは術後の患者の身体的変化に応じた観察の重要性や急性期看護について学び、さらにその後、周術期看護の講義を受けて基礎的なことは履修している。既習の学びを想起しながら取り組む実習となる。</p> <p>本実習では周術期にある患者をうけもつ。患者は手術を受けることで危機状態に直面し、麻酔や手術による侵襲から身体の変化が著しい状態となる。そのため麻酔や手術による侵襲や術後の状態を予測しながら、合併症予防と回復過程に応じた援助を実施し、早期回復へ向けた看護が必要となる。周術期の特徴をふまえた上で対象理解に努め、必要な看護を考える。病棟看護師がどのように対象をとらえて対応しているのか、一緒に行動しながら周術期の看護を学ぶ。また、手術を受ける対象は不安や緊張など様々な思いを抱えている。実習を通して、入院・手術・今後の生活に対する対象の思いをとらえる。そして看護チームの一員として自分の考えをもとに提案できる力や主体性を持ち、多職種の連携と協働を体感する。</p> <p>周術期の看護を通して生命を守る看護の役割と責任を感じながら真摯に学ぶ姿勢を培い、主体的に看護を探究していく。</p>		
目的	周術期にある対象に応じた看護の実践を学ぶ		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 周術期にある対象の特徴を理解し、統合体として健康状態をとらえる。 2. 対象に必要な看護を、既習の知識・技術を統合させて実践する。 3. 周術期にある対象に配慮し、倫理観に基づいた看護を実践する。 4. 周術期にある対象に対応するための、チーム医療・多職種との協働について理解する。 5. 看護の経験を通して看護の意味づけができ、主体的に看護を探究する。 		
評価方法	実習評価表に基づく総合評価		
事前学習	手術前の看護（術前訓練、術前検査、術前処置） 手術中の看護（入室時、麻酔導入、直接介助と間接介助） 手術後の看護（術後のベッド作成、麻酔及び手術侵襲による生体反応、創傷治癒過程、早期離床） 看護理論、障害受容過程、危機理論		
実習記録	共通記録用紙1：わたしの実習での取り組み 共通記録用紙2：行動記録用紙 共通記録用紙3：対象理解用紙 共通記録用紙4：フローシート（周術期） 共通記録用紙6：関連図 共通記録用紙8：看護要約 共通記録用紙9：実施記録 看護の統合と実践実習Ⅰ記録用紙①：アセスメントと援助計画 学びのレポート、評価表		
カンファレンス	テーマは患者の手術日程や状態に応じて設定する <ul style="list-style-type: none"> ・術前の看護について ・病棟と手術室・SICUとの連携、看護師の役割 ・周術期にある対象にどのような看護が必要か（最終日） 		

実習計画

	実習内容
1	病棟オリエンテーション 情報収集・分析 看護師とともに援助
2	看護師とともに援助
3	関連図
4	
5	看護要約
6	評価面接

実習場所：一般財団法人太田総合病院附属 太田西ノ内病院（外科病棟）

授業科目	看護の統合と実践実習Ⅱ（終末期の看護）	学年	3 学年
		単位	1
時期	前期	時間	45
科目設定理由	<p>本実習は3年次前期の実習である。学生は1年次に、看護の対象者個々の暮らしの場における健康支援や成長発達する存在としての理解、2年次は入院という一時的な暮らしの場で療養生活を送る対象への援助を通して看護を学んだ。後期は看護師が対象に関わる際の臨床判断や対応から看護師の思考を学んできた。</p> <p>本実習では終末期の看護を学ぶ。悪性腫瘍の罹患は年々増加傾向にあり、がんを患い人生の終末期を迎える対象者の生活や健康支援は重要な状況にある。また、高齢化が進んだ超高齢社会は慢性疾患の増加など悪性腫瘍だけではない多死社会を意味し、緩和ケアや尊厳ある看取りなど終末期看護がこれまで以上に重要視されている。人生の最終段階における医療は地域の様々な場へ広がっており、どのような場でどのような支援が行われているのか、家族を含めた対象の健康や暮らしを支える看護を学ぶ。どこでどのような最期を過ごしたいか、対象のねがいのもと、ホスピス病棟や終の住処となる施設で終末期にある方の身体的な変化や心理面など多側面から理解し、対象の気持ちに寄り添い、最期までその人らしく生活できるような全人的なかかわり、緩和ケアやQOLの向上に向けた看護の実際を学ぶ。また寺院においては故人を弔う家族への対応や死生観について考える機会とする。これまでの自分の看護を振り返りながら生命の尊厳や生きる意味、その人にとってのよりよい生活について、様々な職種がチームを組んでサポートしている実際を学ぶ。</p>		
目的	終末期にある対象がよりよく生きるための支援の実際を学ぶ		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人生の終末期を過ごす対象を理解し、統合体として健康状態をとらえる。 2. 対象が穏やかに過ごせる看護を、既習の知識・技術を統合させて実践する。 3. 終末期にある対象に配慮し、倫理観に基づいた看護を実践する。 4. 看護チームの一員として行動できる。 5. 看護の経験を通して看護の意味づけができ、主体的に看護を探究する。 		
評価方法	実習評価表に基づく総合評価		
事前学習	<p>実習に必要な内容を考え、自主的に行う。</p> <p>看護理論：死の受容過程</p>		
実習記録	<p>共通記録用紙1：わたしの実習での取り組み</p> <p>共通記録用紙3：対象理解用紙</p> <p>共通記録用紙4：フローシート（終末期）</p> <p>共通記録用紙5：アセスメントと援助計画</p> <p>共通記録用紙9：実施記録</p> <p>看護の統合と実践実習Ⅱ記録用紙①：実習記録 実習場所A・B</p> <p>看護の統合と実践実習Ⅱ記録用紙②：実習記録 実習場所C</p> <p>看護の統合と実践実習Ⅱ記録用紙③：実習記録 実習最終日</p> <p>看護の統合と実践実習Ⅱ記録用紙④：意思決定の尊重について</p>		
カンファレンス	<p>臨地実習では、日々の体験を通してテーマを決め、カンファレンスを行う</p> <p>死について考えることから人間の尊い生命について考える(寺院実習の午後、学内)</p> <p>意思決定の尊重について(最終日、学内)</p> <p>終末期の看護の学び(最終日、学内)</p>		

実習計画

	実習内容
1	下記AまたはBを2つずつ実習
2	施設の特徴と対象への支援の実際を学ぶ。
3	C寺院では死生観から個人の尊厳や生命の尊さを考える（午前寺院、午後学内で実習）
4	下記AまたはBを2つずつ実習（1・2日目Aで実習をした学生は4・5日目はBとなる）
5	施設の特徴と対象への支援の実際を学ぶ。
6	評価面接

実習場所A：坪井病院ホスピス病棟

実習場所B：特別養護老人ホーム(あたまホーム、玉川ホーム)

実習場所C：寺院(善導寺、天性寺)

授業科目	看護の統合と実践実習Ⅲ（看護過程の展開）	学年	3 学年
		単位	2
時期	前期	時間	90
科目設定理由	<p>本実習は3年次に行われる看護過程の展開を行う実習である。学生は1年次に、看護の対象者個々の暮らしの場における健康支援や成長発達する存在としての理解、2年次の基礎実習では入院という一時的な暮らしの場で、必要となる援助の実践や看護師が対象に関わる際の臨床判断など看護師の思考を学んできた。</p> <p>本実習は、対象者の健康状態に応じて健康上の課題を見極め、必要となる看護を対象者に合わせて実践する、そして期待される成果に到達したか、対象の反応や変化をもとにフレクシオンする、系統的で意図的な看護を展開することを学ぶ。</p> <p>対象に必要な看護を実践するためには、対象理解が必要となる。科学的根拠をもとに病態生理を理解し、身体的・精神的・社会的・スピリチュアル的側面から対象をとらえる。相手を思いやり、苦痛や思いに気づき、配慮しながら関係性を築く。対象の生活習慣、価値観、健康管理能力にも着目し、退院後の生活を見据えた関わり、社会資源の活用や対象のよりよい生活を支える多職種連携や看護師の役割について考え、チーム医療や看護師の役割について学ぶ。</p> <p>対象にとって最善の健康状態をめざす、より個別的な看護の展開を通して、科学的・論理的思考、看護実践能力が持てるようにする。また看護過程全体や自己を客観的に振り返り、自分の理想とする看護ができているか、自己実現へ向けて謙虚に学び続ける姿勢を養う。</p>		
目的	対象の健康状態に応じ、看護を意図的に実践できる能力を養う		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対象を多様性のある統合体としてアセスメントし、健康状態をとらえる。 2. 対象の健康上の課題に対して必要となる看護を計画し、対象に合わせて実践する。 3. 倫理観に基づいた看護を実践する。 4. 看護チームの一員として行動できる。 5. 対象の健康状態に応じ必要な看護を提供できたかフレクシオンし、主体的に看護を探求する。 		
評価方法	実習評価表に基づく総合評価		
事前学習	<p>疾患の病態生理</p> <p>疾患に伴う検査・治療・看護、看護過程の授業内容の復習</p> <p>看護理論：病みの軌跡、オレムのセルフケア理論、ロイの適応理論、障害受容過程など</p>		
実習記録	<p>共通記録用紙1：わたしの実習での取り組み</p> <p>共通記録用紙2：行動記録用紙</p> <p>共通記録用紙3：対象理解用紙</p> <p>共通記録用紙4：フローシート</p> <p>共通記録用紙6：関連図</p> <p>共通記録用紙7：プロセスレコード</p> <p>共通記録用紙8：看護要約</p> <p>共通記録用紙9：実施記録</p> <p>看護の統合と実践実習Ⅲ記録用紙①：アセスメント</p> <p>看護の統合と実践実習Ⅲ記録用紙②：統合アセスメント</p> <p>看護の統合と実践実習Ⅲ記録用紙③：看護計画</p> <p>学びのレポート、評価表</p>		
カンファレンス	<p>実習の進行状況に合わせてケースカンファレンス</p> <p>プロセスレコードカンファレンス</p> <p>対象に合わせた看護の実践と看護に対する考え(最終日)</p>		

実習計画

	実習内容
1～3	病棟オリエンテーション、情報収集・分析
4	関連図、統合アセスメント
5	看護計画立案
6	看護計画に基づいて実践する 中間評価
7～10	日々評価・修正 より対象に合わせた援助を実践する
11	看護要約
12	評価面接

実習場所：太田西ノ内病院病棟2 か所

授業科目	看護の統合と実践実習Ⅳ	学年	3 学年
		単位	2
時期	後期	時間	90
科目設定理由	<p>臨床では状況に応じて今その人に必要な対応を判断し行動する臨床判断能力が求められる。学生は2年次基礎Ⅱ実習において看護師との行動から看護師の臨床判断を学ぶ実習を行っている。そして3年次前期は各領域の健康状態に応じた看護を学んできた。本実習は卒業前最後の実習であり、既習の知識、技術、倫理観を統合し、看護師の臨床判断を通して自身も対象に必要な対応を考え、判断・行動できるよう看護実践能力の向上をめざす。</p> <p>学生はこれまで特定の対象を受け持ち、個に応じた看護を展開してきた。今回は看護チームに入り、看護師と一緒に複数の患者に対応する多重課題を体験する。多重課題のなかで看護師がどのように優先順位を考えているのか、安全性や安楽の確保、時間管理などの実際を学ぶ。実習後半は、自分自身も対象者のニーズに対応しながら看護実践を判断し行動する。</p> <p>実習期間中、病棟科長に付いて行動する時間をもち、対象のよりよい生活をめざした看護管理者の役割を学ぶ。また、夜間実習を体験し、夜間の病床環境や日中とは違う対象の様子、看護師の役割を学ぶ。さらに対象を取り巻く多職種によるチーム医療や連携などの協働を理解し、自身もチームの一員として行動できるようにする。</p>		
目的	チームの一員として看護を実践できる能力を養う		
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対象の健康状態を理解する。 2. 多重課題のなかで看護を判断し、知識・技術を統合させた看護を実践する。 3. 倫理観に基づく誠実な看護を、責任をもって実践する。 4. 対象のよりよい生活をめざした看護管理やチーム医療について理解し、看護チームの一員として行動できる。 5. 看護の実践を通して看護の専門性について考え、看護観を深める。 		
評価方法	実習評価表に基づく総合評価		
事前学習	実習に必要な内容を考え、自主的に行う。		
実習記録	<p>共通記録用紙1：わたしの実習での取り組み 共通記録用紙3：対象理解用紙 共通記録用紙4：フローシート 共通記録用紙8：看護要約 共通記録用紙9：実施記録</p> <p>看護の統合と実践実習Ⅳ記録用紙①：行動記録用紙 看護の統合と実践実習Ⅳ記録用紙②：夜間実習行動記録用紙 看護の統合と実践実習Ⅳ記録用紙③④：アセスメントシート1・2 看護の統合と実践実習Ⅳ記録用紙⑤：統合アセスメント 看護の統合と実践実習Ⅳ記録用紙⑥：看護計画 看護の統合と実践実習Ⅳ記録用紙⑦：即応的な看護実践 看護管理レポート、学びのレポート、評価表</p>		
カンファレンス	<p>看護管理についての学び 臨床判断についての学び 看護についての考え</p>		

実習計画

	実習内容
1	チームには入り、看護師と共に援助 かつ1人の患者にじっくり丁寧に関わる
2～7	夜間実習（深夜帯実習1回、準夜帯実習1回ずつ行う） 看護管理実習（病棟科長に半日ついて行動する）
8～10	看護管理について、臨床判断について、看護についてのカンファレンスを行う
11	午後、学内実習（看護についての探求、文献検索、記録整理）
12	看護についてカンファレンス
13	評価面接

※深夜帯実習：5:30～14:00（1時間休憩、7.5時間）

※準夜帯実習：13:00～21:30（1時間休憩、7.5時間）

※準夜実習翌日の実習：13:00～17:00（4時間）

※深夜実習終了後、準夜実習翌日の午前中は、自己の学習を深める時間とする。

※11日目は8:30～12:00(3.5時間)午後は、学内実習時間とする。

実習場所：太田西ノ内病院、太田熱海病院